

## 二つの『好色一代男』

近藤 尚子\*

Two Editions of *Koshoku-ichidai-otoko*

Takako Kondō

要旨 井原西鶴『好色一代男』には上方版と江戸版とが存在する。従来江戸版は『一代男』研究のうえで顧みられることがあまりなかったが、近年少しずつその意味が明らかにされてきている。この二つの『一代男』を比較し、そこから浮かび上がる表記上のいくつかの問題点とその位置づけについて考察を試みた。上方版が漢字に仮名を並記するという表記の方針をとるのに対し、江戸版はほとんど「ふりがな」を用いている。その結果、多くの語が漢字のみまたはかなのみという上方版とは異なるかたちをとることになったが、実は上方版のものかたちを生かしているのである。また、かなづかいにかかわる改変は上方版自身ですでに内包している「揺れ」を反映しているものであるが、助詞「お」表記は江戸版独自のものである。さらに上方版から江戸版へ、漢字→かな、逆にかな→漢字と改められている例には重なりが多くみられる。そのことからいわゆる「常用」の表記が必ずしも常に一定のかたちをとらないことを論じた。

### はじめに

井原西鶴の『好色一代男』（以下、『一代男』）初版は天和二年十月の刊記をもつ、版下水田西吟、挿絵西鶴によるもので、大坂の荒砥屋孫兵衛可心の出版である。同じ版木を用いて、計五種の版が存在することが知られている。<sup>(1)</sup>一方この『一代男』には江戸版が存在する。「江戸版は上方版の覆刻であるが、本文の漢字を多く仮名に改めているのが特色で、誤写・誤刻が目立つ」、<sup>(2)</sup>「この師宣画の江戸

板の本文は、上方板の原作に不忠実で、多く漢字を仮名に直し、誤脱があったり、余分な文句を加えたりしている。作者西鶴や板元の承諾を得ての刊行とは思われない。要するに流行画家師宣の挿絵で売ろうとした海賊版の一種である。但し原作ではそのままになっている巻六の目録における年齢の錯記は、当然のことながら訂正されている。<sup>(3)</sup>などとされ、『一代男』研究の上ではあまり顧みられることはなく、管見では専論はわずかに三編を数えるのみである。<sup>(4)</sup>もち

\* 本学助教教授（今野尚子）国語学

ろん、西鶴の用字・用語、『一代男』の成立などを論じるために江戸版を利用することには積極的な意味はない。しかし「海賊版の一種」ではあったとしても、江戸版にも四種の版が知られており、刷りが重ねられたことがわかっている。つまり当時江戸版も『一代男』のひとつのかたちとして受け入れられていたのである。そのことから出発して、このふたつの『一代男』をとくに与えられたかたちのうえから全巻にわたって比較し、その意味を考えてみたい。<sup>(6)</sup>

一

まずは両者のかたちの実際をみるために上方版第一巻8丁裏（18ウと表示する。以下同じ）、第七巻18丁表（718オ）のそれぞれ半丁分、計一丁分を上方版・江戸版と並べて示す。半丁分の語数が比較的少ない箇所として18ウを、多い箇所として718オを選んだ。（以下、引用はとくに仮名字体に関しては現行のものに改めたところがある。また、引用文中の「は改行を、」は改面を示す。また、当該部分の句読点は、上方版は・、江戸版は・と。とをまじえるが、便宜。で示す。）

〈上方版〉18ウ

かねて。そこ／＼にして。塗下駄をはきもあへず。あがれば。袖垣のまばらなるかたより。女をよび懸。初夜のかねなりて。人しづまつて後。これなるきり

戸をあけて。我かおもふ事をきけとあれは

。おもひよらずと答ふ。それならば今の事を。

おほくの女共に。沙汰せんといはれける。何をか

見付られけるおかし。女めいわくながら。とも

〈江戸版〉17オウ7ウ

かくもと云捨て。只何こゝろもなく。みだれし烏羽玉の夜の髪は。たれか見るべくと。はしたなく。つかみさがして。つねの姿なりしに。かの足音してしのぶ。女是非なく。御こゝろにかなふ

（らへば。たまり）かねて。そこ／＼にして。ぬりげたをはきもあへず。あがれば。そでかきのまばらなるかたより。女をよびかけ。初夜のかねなりて。人しづまつてのち。これなるきり戸をあけて『我おもふ事をきけとあれべ。おもひよらずとこたふ。それなら』ば今の事をおほくの女共に。さたせんといわれける。何をか見つ』けられけるおかし。女めいわくながら。ともかくもといゝすてゝ」たど何こゝろもなく。みだれしうばたまのよるのかみハたれか見」るべくと。はしたなく。つかみさがして。つねのすがたなりしに」かの足をとしてしのぶ。女せひなく。御こゝろにかなふ。（やうにもて）

〈上方版〉718ウ

此時のうれしさ。あの君七代まで。太夫冥加あれとぞ願ふ。二階」にハ。久都はしのこの。上り下まで。吟味しをるこそ憎し。吾妻」しんきの片手に。文共引きき。くはんせこよりのをべて。ちいさきかる」ことを仕懸。天目をのせて。暑間の酒をつぎ。我口添て。そろ／＼下へおろせば。世之」介此心入を感じ。三度戴き。喉通る間の楽。千代も経ぬべし。半分過」引て。息をつく所へ。なか津濱山椒を一房。肴ハ是にと。小声に成て給るこそ。又忝し。夫よりなかつハ。二階に世之介を

〈江戸版〉七17ウ〜18ウ

手引して。久都ひさいちに取付。尤いと愛らしき「坊さま。此胸むねのつかへを。さすれと。うれしがるやうに。手を取て。そこら。其下そのしたまだ」其下そのしたと。かんじん邊あだりまで。手をやらして。久都ときめく内に。吾妻あづまに思ひを「はらさせ。かしこき仕業しわざ。目の見えぬ者こそ。しらぬが佛ほとけ。あゝ有難ありがたき。太」夫さまの。黄金わうごんのはだへと。うか〜とさすつて。居内ゐるうちに。お客立きやくたしやりませひ

此ときのうれしき。あのきミ七代まで。太夫めうがあれとそ。願ねががふ。二かいにハ。ひさいちはしごのあがり」おりまでぎんミしをるこそにくし。あつましんきのかたてに。ふミ共引さきく「へんぜよりのべて。ちさきかるこそ。てんもくをのせてあいがんのさけをつぎ」我口わがくちそへてそろ〜したへおろせハ世之介よせのすけ心入こころいれをかんし。三度さんどいたゝき『絵』のどとをる間のたのしみ。千代ちよもへぬへし。はんぶん過引あやうりて。いきをつく所へ。なか津なかつつけざんしやうを一ふさ。さかなハ是これにと。小こゑになりて「給るこそ。又かたけなし。それよりなかつハ。にかいに世之介よせのすけを手引して」ひさいちに取つきいとしらしきほんさま。此むねのつかへを。さすれと」うれしがるやうに。手をとつて。そこら。其下そのした。またその下と。かんじんあた」りまで。手やらして。久いちときめく内に。あづまに。思ひをはらさせ」かしこきしわざ。目の見えぬ者こそしらぬがほとけ。あゝありかたき」太夫さまのわうごんのはだへと。うか〜とさすつてゐる内に。おきやくたゝしやりませひ

上方版を一見して明らかなのは、いわゆるふりがなが多用されて

いることである。とりあえず単語を単位としてみていくと、一8ウでは漢字にかなが添えられている語は一八、一方漢字のみの語は一三である。七18ウではかなが添えられている語が五三に対し、漢字のみは二九である。割合に変化はあるにしても、かなが並記された語が多数を占める。このことは上方版『一代男』全巻を通じて同様である。つまり上方版では、漢字表記された語の多くにはかなが並記されているのである。そしてこの方針は『一代男』に限ったことではない。西鶴作品の用字の特殊性が論議されることがあるが、その特殊性は多くの場合、かなを並記することによって支えられている。たとえば八2ウに「寒さ(さへかへ)る月の出れば」(以下、印刷の煩雑を避けるため「ふりがな」は( )に入れて示す)とあるが、かなが添えられていなければ、「寒さ」を直ちに「サエカエル」と読むことは困難であろう。かなはふりがなの形をとり小書きにされているために、「さえもの」ととらえられがちである。しかし両者は同じ重さをもっているとみるべきではないだろうか。

A 断り(ことわり)なしに 一14ウ3

出替り(でかわり) 一21オ4

最も(もっとも) 二12ウ2

捨難く(すてかたく) 二18ウ4

商ひ(あきなひ) 三17オ4

柄長く(つかながく) 七5オ3

B 利口(りこう)さう成男(おとこの)行ハ。 二17ウ6

素足(すあしに)見合(ミあはせ) 六19ウ5

Aは本行にある送りがなを含んでかなが添えられた例、Bは助詞が送りがなに繰り込まれた例である。これらの例は、かなが単に漢

字のよみを示すために添えられているのではなく、漢字と支え合う存在として並記されていたことを示してはいないだろうか。本行の漢字が主でありふりがなは従であるというとならえ方ではなく、どちらか欠くことのできないものであり、伝達に関しては、漢字が表意機能をかなが表音機能を担い、漢字かな混じりという表記システムのうちでは、漢字が分節機能をかなが表語機能を担うことによつて、きわめて高度な伝達性を発揮しているとらえるべきであろう。そこで以下本稿では、あえて「ふりがな」という呼び方を避け、「漢字かな並記」と呼んでおくことにする。ただしこれがかうまく発揮されなかった例もみられる。江戸版『一代男』には上方版の「口鼻(かゝ)」をよみあやまつて「口かゝ」とした例が二つ(二11ウ2・六14オ11)ある。

このような「かな並記」を多用する上方版に比べ、江戸版はかながちである。さきに掲げた二箇所一丁分の本文の中に、江戸版では漢字が合計七一字みえている。これを上方版で見ると、すべて漢字のみかまたは漢字とかなとが並記されている。その内訳を出現順につきに示す。

〈表1〉

漢字のみ↓漢字のみ(五四字)

女人	我事	今事	女見	女何	見御
此七代	太夫	共引	世之介	此心入	三度間
千代	過引	所津	一是給	又世之介	手引
手久(都)	内思	ひ目	見者	太夫	

漢字かな並記↓漢字のみ(一七字)

初夜(しよや) きり戸(と) 共(とも) 何(なに)

足(あし) 女(おんな)  
願(ねが) ふ二(に) 我口(わがくち) 小(こ) 取(とり) 其下(そのした) 下(した) 内(うち)

漢字のみ↓漢字のみの例は「改変」の手が加えられていないものである。出現順に並べたこれらの漢字には少なからず重なりがあることをここでは指摘しておきたい。また、上方版がかな表記であつて江戸版が漢字表記という例はこの一丁分にはみえない。

さて、上方版がかな、江戸版も同じくかなでそのままうけつがれているものは、漢字↓漢字と同様、全く改変の手が加わっていない箇所であり、とりあえず問題にしない。ここでは江戸版がかな表記である箇所の中で、上方版がかなのみではない部分(つまり漢字のみか漢字かな並記ということになる)について検討してみる。その例を先の一丁分から拾ったものが次の〈表2〉である。やはり出現順に示す。各例の語頭の記号については後述する。

〈表2〉

— 卷一

- 塗下駄(ぬりけた) ↓ぬりけた
- 袖垣(そでかき) ↓そでかき
- △よび懸↓よびかけ
- 後(のち) ↓のち
- 答(こた) ふ↓こたふ
- 沙汰(さた) ↓さた
- △見付られける↓見つけられける
- ×云捨(いひすて) て↓いゝすてゝ
- 只(ただ) ↓たゞ

二つの『好色一代男』

卷七

- 烏羽玉(うばたま) ↓うばたま
- 夜(よ) る ↓よる
- 髪(かみ) ↓かみ
- 姿(すがた) ↓すがた
- 足音(あしをと) ↓足をと
- 是非(ぜひ) ↓ぜひ
- 時(とき) ↓とき
- 君(きみ) ↓きみ
- 冥加(めうが) ↓めうが
- 二階(にかい) ↓にかい
- 久都(ひさいち) ↓ひさいち
- 上(あが) り下(おり)
- 吟味(ぎんみ) ↓ぎんみ
- 憎(にく) し ↓にくし
- 吾妻(あづま) ↓あづま
- 片手(かたて) ↓かたて
- 文(ふみ) ↓ふみ
- 天目(てんもく) ↓てんもく
- ×暑間(あつが) ↓あいがん
- 酒(さけ) ↓さけ
- 添(そへ) て ↓そへて
- 下(した) ↓した
- 感(かん) じ ↓かんじ
- 戴(いたど) き ↓いたどき

- 喉(のど) ↓のど
- 通(とを) る ↓とをる
- 楽(たのしみ) ↓たのしみ
- 経(へ) ぬべし ↓へぬべし
- 半分(はんぶん) ↓はんぶん
- 息(いき) ↓いき
- 漬山椒(つけざんしやう) ↓つけざんしやう
- 一房(ふさ) ↓一ふさ
- 肴(さかな) ↓さかな
- 小声(こごゑ) ↓小こゑ
- △成て ↓なりて
- ×忝(かたしけな) し ↓かたけなし
- 夫(それ) ↓それ
- 二階(にかい) ↓にかい
- 久都(ひさいち) ↓ひさいち
- 取付(とりつき) ↓取つき
- 尤愛(いとし) らしき ↓いとらしき
- 坊(ほん) さま ↓ほんさま
- 胸(むね) ↓むね
- 取(とつ) て ↓とつて
- 其下(そのした) ↓その下
- 邊(あたり) ↓あたり
- △久都 ↓久いち
- 吾妻(あづま) ↓あづま
- 仕業(しわざ) ↓しわざ

○佛(ほとけ) ↓ほとけ

○有難(ありがた) き↓ありかたき

○黄金(わうごん) ↓わうごん

○居(ゐる) ↓ゐる

○お客(きやく) ↓おきやく

○立(たゝ) しやりませひ ↓たゝしやりませひ

以上わずか一丁分(上方版では一話が二丁半、全五四話であるから単純計算すれば総計一三五丁となる)で六四箇所(数え方には異論もあろうが、例示した一行分を一箇所とした)が江戸版ではかなのみの表記に「改められ」ている。その部分を上方版で見ると、ほとんどが漢字かな並記されている。先述のように上方版では漢字を多くまじえ、かな並記を多用するのに対し、江戸版ではこの形をとることがごくまれである。江戸版全冊を通じて「ふりがな」の付されている箇所は二〇に満たない<sup>7)</sup>。これは例として掲げた上方版一八ウ半丁にみえている漢字かな並記の語数にはほぼ相当する。上方版に比べ江戸版の「ふりがな」がいかに少ないかがわかるであろう。上方版は漢字かな並記というシステムを選択し、江戸版はそれを極力避けるという方針をとった。江戸版の「ふりがな」はやはり漢字のよみをたすける補助手段としての「ふりがな」であるといえるべきであろう。ただし、この「ふりがな」はいずれも上方版で並記されているかなをそのまま残したものである。

かな並記という方法を排すれば、漢字で書くかなで書くかという選択を迫られることになる。そしてかなを多く選択してできあがったのが江戸版なのである。さきに掲げた一丁分六四箇所のうち〇印を付した五二箇所までが、漢字かな並記されている部分のかなを

そのままとったものであった<sup>8)</sup>。この傾向は『一代男』全巻に敷衍できると。つまり、江戸版が上方版の「漢字を多く仮名に改めている」ことの実態は、漢字かな並記の上方版の本文から多くの場合かなを選択しているということなのである。

## 二

〈表2〉に示した六四箇所のうちの五二は先述のように江戸版がそのままかなを選択している。それでは残り一二箇所はどのようになっているであろうか。

まず、江戸版がかなを選択した際「そのまま」ではなくなってしまうものがある。〈表2〉中の×印を付した三例、すなわち

云捨(いひすて) て↓いゝすてゝ

暑間(あつがん) ↓あいがん

黍(かたしけな) し↓かたけなし

がこれにあたる。まずことわっておかなければならないのは、ここで「そのまま」というときにまずは濁点の有無、仮名字体の異なりは考慮しないということである。版本の場合、濁点の有無を判断することはむずかしいし、本稿ではいわゆる「仮名字遣」(すなわち異体仮名レベルでの用字法)についてまでは考察の範囲としていないからである。さてここにあげた三例のうち、最初の一例と後の二例とは性質が異なっている。すなわち最初の一例はかなづかいにかかわる例であるが、後の二例は語形にかかわる例であり、さらにいえば江戸版の誤記の例である。語形にかかわる例については別の機会に譲ることにし、ここではかなづかいにかかわる例の扱いについて考える。

この時代、語中尾のイ音をあらわすかなとして、い・ひ・ゐが用いられていたことは周知のことである。しかしその状況を文献ごとに詳細に調べれば、かなづかいにあるかたむぎをもつものがあることもまた事実である。西鶴に関していえば、版本の版下の筆者によって使用するかなに傾向の違いがみられるという指摘もある。『一代男』の版下は西吟の筆になるが、かなの使用にある程度のかたむぎが見られることはすでに報告されている<sup>9)</sup>。しかし一方で、それはあくまでもかたむぎであって、そこから外れるものをも現実には含んでいる。たとえばたくさんの「恋(こひ)」の中に「恋(こい)」「(三5オ3)があり、「云(い)」わけ「(一6オ9)、「いひ分(わけ)」「(三6ウ9)、「云懸り」(二2ウ4)があることは、上方版自体がゆれており、すでにいひすてていゝすてゝを生じる可能性を自身のうちに内包していることを示している。つまり、上方版から江戸版へという流れの中で、ひゝい、逆のいゝひ、あるいはひゝい、いゝゝ(あらはいで)(一5ウ10)の一例)、ゐゝひ(紅(くればゐ)(七2オ10)の一例)も大きくとらえれば時代の状況を反映しているといえよう。これらの例はもちろん江戸版における「改変」ではあるのだが、上方版自体のもつ揺れの範囲内にあると考える。

しかしつぎの例は注意を引く。助詞ヲの「を↓お」という改変の例である。江戸版には全巻を通じて助ヲを「お」で表記した例が一五例みられる。

〈表3〉

爰(こゝ)をも(三6ウ10) ↓こゝお」も

嶋(しま)をよきとおもへばこそ(三13ウ11) ↓しまおよきと

おもへばこそ

人を見(ミ)立るやつかなと(五4ウ9) ↓人お見立るやつか

など

嶋布(しまぬの)を織(おる)(五7ウ4) ↓しまぬのお」お

る

金(きん)左衛門を誘引(さそひ)て(五7ウ7) ↓金左衛門

お」さそひて

ぬけ舟(ふね)を急(いそ)がせ(五7ウ8) ↓ぬけふねおい

そ」がせ

やかまし」き事をも(五7ウ11) ↓やかましき事おも

ちいさき編笠(あみかさ)をかづき(五8オ1) ↓ちさきあみ

かさお」かづき

姿(すがた)を見尽(つく)し(五8オ6) ↓すかたお」見つ

くし

誰(たれ)をか恋(こひ)たまふ(五11ウ8) ↓たれおか恋給

ふ

禿(かぶろ)を呼(よび)よせ(七2ウ9) ↓かぶろおよびよ

せ

肌(はた)をゆるして(七12ウ10) ↓はたおゆるして

十蔵宇」兵衛を仕立(したて)(八5ウ6) ↓十蔵うひやうへ

おしたて

十蔵手をさして(八6オ5) ↓十蔵手おさして

はや其家(そのいゑ)を賣(うり)「(八11オ10) ↓はや其家お

うり」

助詞ヲに関しては上方版で約一三〇〇箇所すべて「を」(字母は〈遠〉と〈越〉とがある)であって例外はない。一般にいわゆるかなづかいに揺れがみられる場合でも、助詞に関しては伝統的な表記を守ることに通例である。しかも『一代男』では、もとになつていゝる上方版に例外がないにもかかわらず江戸版でこの一五例が「お」を使用しているのである。この例をながめていてひとつ気づくことは、この現象が巻三・五・七・八の四巻にみられることである。とくに巻五の7ウゝ8オにかけては近接して六例がみられる。もちろん上方版のこの部分の助詞ヲが江戸版ですべて「お」で表記されているのではない。「男ハ大あミを引テ」夜日をおくりぬ。」など、「を」をそのまま受け継ぐ箇所もまじる。しかし助詞ヲの「お」表記一五例中半数以上の八例がこの巻五にみられることは「集中」といつてもよいのではないだろうか。さらに唯一の助詞ハ(ただしかなは「ハ」)↓「わ」の例が五1ウ6にみえることも軌を一にすることがらではないだろうか。あるいはこの現象は、複数いたとされる江戸版の版下書きによるかたよりであるのかもしれない。

上方版で、助詞ヲをも含めた「お・を」について語ごとの用字を整理してみると、意外なほど揺れが少ない。「相生・緒・折節・起く・置く・押す・覚え・卑罵表現のゝおる(動詞は出現する活用形および複合語を含む)」と異なり語でいえばこれだけである。「お・を」の使用される頻度からいえば、上方版内部での揺れはかなり少ないといえるであろう(いま語中尾の「ほ」は除外する)。

一方で上方版から江戸版への「改変」も、は・わ、い・ひ・ゐ、え・へ・ゑに比べてきわめて少なく、十二例を数えるのみである。それを出現順に示したのがつぎの〈表4〉である。語頭の▲について

ては後述する。

〈表4〉

祇園細工(きをんさいく)(一19ウ11) ↓ぎおんさいく

▲仕置咄(しをきばな)し(二14オ7) ↓しおき咄し

▲寛(をほえ)侍る(三3オ5) ↓おほへ侍る

教(をし)え(三3オ9) ↓おしゑ

雄嶋(をしま)(三21オ5) ↓おしま

▲押(をし)入有て(四2オ6) ↓おし入有りて

▲押(をし)とどめて(四6ウ11) ↓おしとどめ

▲しをつて(四11オ1) ↓しおつて

音(をと)なし川(四19ウ10) ↓おとなし川

粧(よそを)ひ(五3ウ11) ↓よそおひ

▲押し(をしとど)め(五11オ10) ↓おしとどめ

お初尾(はつを)(八2オ6) ↓おはつお

▲印を付した例はすでに上方版内部での揺れがみられた語である。十二例すべてが「を↓お」という方向の改変である。

揺れの少ない上方版の「お・を」の大部分をそのまま受け継いでいる江戸版は、結果としてやはり揺れが少ない。その中で助詞ヲに関してこのような状況であるということをどう考えるか。この時代、かなを用いて文を綴ろうとするとき、その用い方は極めて表音的な傾向と、語によって固定された、つまりかなづかい的な傾向との間を揺れ動く。江戸版の助詞ヲの「お」表記は、少なくともこの資料が上方版ほどかなづかい的な傾向に傾いていないということを示している。それを誤りといえはいえるわけであるが、かな並記を用いない、という方針と同様、方針の異なりととらえることも可能

であるかもしれない。

三

さて〈表2〉にもどって、●印を付した以下の五例は上方版に並記されたかなの一部だけが江戸版でかなになっている。

足音・二階・小声・取付・其下

つまりこれらの五例は、上方版の漢字・かな並記の、一部を漢字に一部をかなにと選択したものである。これもいってみれば江戸版が上方版を「そのまま」受け継いだ例である。その意味で先にふれた五二例と同じであるし、また漢字↓漢字、かな↓かなという「そのまま」の例と同じであるということが出来る。

ここまでで〈表2〉の六四例中六〇例についてはすでに言及した。残る四例は△印を付したつぎの例である。

よび懸↓よびかけ

見付られける↓見つけられける

成て↓なりて

久都↓久いち

この四例こそが、上方版の漢字を江戸版で「仮名に改め」た例ということになる。この四例を含め、同様の例を巻別に集計したものがつぎの〈表5〉である。

〈表5〉

巻	一	二	三	四	五	六	七	八	計
	34	55	53	36	34	90	80	30	412

全体で四一二という数字はもちろん少ない数ではない。しかし、一三五丁という上方版の丁数からみれば一丁あたり三箇所である。

〈表2〉で△印を付した四箇所はその意味で平均的な数値といえるであろう。そして一丁あたり三ないし四というこの数字は決して多くはないと思うのである。一方ではほとんどの部分が上方版をそのまま、あるいは生かした形で江戸版の本文が作られているのであるから。そしてこの四一二例の中には重なる例が多いことも注目すべきであろう。たとえば八例以上のものをあげるとつぎのようになる。

也↓なり

六〇例

成↓なる・なり・なつ

三八例

様↓さま

二二例

懸↓かく・かか・かけ

一四例

立↓たつ・たち・たて

八例

行↓ゆく・ゆき・ゆけ

八例

迄↓まで

八例

「也」や「成」は使用頻度が高い(『一代男』の内容からみて「様」も使用頻度が高い)ということも考慮してもかなり集中していると思われることができる。

一方、最初に掲げた一丁分にはみえなかったが、江戸版には上方版のかなを漢字に改めた例が存在する。これをやはり巻別に集計したものが〈表6〉である。

〈表6〉

巻	一	二	三	四	五	六	七	八	計
	11	19	33	14	27	6	11	20	141

一四一例といえは一丁に平均一箇所ということになり、これも決して少なくはない。とくに江戸版の、かながちの表記をとるという

方針を考えたとき、かな↓漢字の改変はむしろこの方針に逆行するものである。それが一四一箇所ある。さてこの〈表6〉の例に關してもやはり重なりが多いことが指摘できる。八例以上のものをあげる。

こゝろ↓心	三〇例
あり・ある↓有	二三例
うち↓内	一三例
ども↓共	一〇例
ほど↓程	八例

これを〈表1〉とてらしあわせると、共通するものがいくつかあることに気づく。すなわち、「共・心(入)・内」の三字である<sup>(11)</sup>。最初に示した〈表1〉は例示した一丁分で江戸版が漢字表記をとっているものであった。上方版が〈表1〉のように、漢字あるいは漢字かな並記である場合に限らず、かなで表記されている場合にも江戸版が漢字を選択することが多かったのが、これらの例なのである。

かながちの江戸版の中で方針に逆行するようにみえるこれらの漢字は、江戸版においてかなのたすけを必要とせずに読むことが可能であると認識されていたのではないか。一方の上方版からこの現象をながめたときに、たとえば「内」は上方版においては、漢字のみ・漢字かな並記・かなのみ、の三様に表記されている。このことは「共」についても同様である。つまり上方版において「内」や「共」は極端にいえばどのように書いてもかまわなかったのである。さらに「ども↓共」は右にあげたように十例みられるが、逆の「共↓とも・ども」も実は四例ある。「迄↓まで」は八例あるが、逆の「まで↓迄」も三例ある。「共」や「迄」は江戸版でも両様の表記をと

っているのである。このように上方版・江戸版がそれぞれの中に「揺れ」を抱えていると同時に全体が揺れているのである。ある語をどの字種でどのように表記するかという問題も、かなづかいと同様、上方版・江戸版を含めてさらに大きくとらえていかなければならないであろう。固定的な表記が必ずしもいわゆる「常用」漢字ということにはならないのかもしれないのである。どのような表記をとっても必ず一定の「音声」と「意味」とに結びつくならば右のような「揺れ」が生じる可能性もある。

もちろん固定的な表記のみられる語もある。たとえば江戸版では上方版の「臺所(だいどころ)」八例のうち七例までが「だい(たい)所」と表記され、一例のみが「だいどころ」である。「男・女・心」も江戸版では漢字で表記されることが多い。これらのことからの意味についても、他の資料も視野に入れつつ考えていかなければならないであろう。

## おわりに

以上、二つの『一代男』の比較を通して、何をどのように考えるべきかということを論じた。最後に、本稿でとりあげることのできなかったいくつかの問題にふれておく。本稿は江戸版の「かながち」であるという点に着目し、上方版と江戸版との字種の異なりを中心に分析を進めたので、「誤写」の問題にはほとんど言及できなかった。例示した上方版七18ウ4の「仕懸(しかけ)」が江戸版にはない。このような脱落の例は大小含めて他にもみられる。助詞の脱落や挿入も全体で七五箇所ある。七18ウ9の「手をやらして」の「を」は江戸版にはみえない。また、語形にかかわる例として〈表2〉で

は×印を付した三例のうち二例、すなわち「暑間(あつがん) ↓ あいがん」「忝(かたしけな) ↓ かたけなし」をあげた。例示した七例にはこのほかに

はしこの↓はしじ

くはんぜこより↓くはんぜより

ちいさき↓ちいさき

を見出すことができる。「はしこの・ちいさき」は他にも一例ずつ存在する(「ちいさき」の例は〈表3〉に示した五・八・一の例である)。このほか文法にかかわる例なども拾うことができる。もちろん単なる「誤り」の例も含まれてはいる。しかしここにあげたような例は「誤写」として一括してしまおうのではなく、それぞれの持つ意味を明らかにしていくことが必要だと思ふのである。

(註)

- 1 新編日本古典文学全集「井原西鶴集 1」解説五六九頁 一九九六年小学館刊
  - 2 『日本古典文学大辞典』第二巻 四九五頁 一九八四年 岩波書店刊
  - 3 註1に同じ
  - 4 堤精二氏「江戸版『好色一代男』覚え書」『西鶴論叢』(一九七五年中央公論社刊) 所収
- この中で堤氏は「川崎版の『一代男』を上方版の異版としてでなく、江戸の出版物の一つとして見たらどうであらうか。」(二七八頁)とし、「江戸版の製作者は意外なほどに、読者が文章を理解し易いようにというところを考慮していたと思われる。」(二八〇頁)とされる。
- 森頭治氏 a 「好色一代男」江戸板に関する二、三の疑問 『春日正三先生還暦記念ことばの論文集』(一九九一年 双文社刊) 所収
- 森頭治氏 b 「好色一代男」江戸板の漢字の仮名化について——巻一を中心に—— 『立正大学文学部論叢』第九十二号(一九九〇年) 所収

森氏は a で「大坂板から江戸板を作成する際」の「改変」の種類を大きく五つに整理し、b で「とくに漢字の残存量について」資料を示しつつ考察された。ここでは「改変」の種類は四つに整理されている。そして巻一のみの調査ではあるが、漢字残存量(漢字使用率)二五%という数値を示された。

5 註4 堤氏論文による。

6 調査には以下の二種の影印を用いた。底本はいずれも赤木文庫本である。

上方版：『好色一代男(大坂版)』近世文学資料類従 第二期 西鶴編1 (一九八一年 勉誠社刊)

江戸版：『好色一代男(江戸版)』近世文学資料類従 第二期 西鶴編2 (一九七四年 勉誠社刊)

なお、一九九四年に「国文学研究資料館影印叢書1」として、同資料館蔵本(上方版)が影印刊行された(汲古書院刊)。

7 森氏の調査では、上方版にふりがながなく江戸版でふりがなが付されているものが三例報告されているが、今回調査した江戸版ではいずれもかな書きになっていた。

8 森氏の分類では

二—A 大坂板で漢字に振り仮名があり、それを踏襲して仮名化しているものにあたる。巻一の十丁裏までの十丁分で約三百二十件あるということである。(註4 論文 a 三〇六頁)

9 島田勇雄氏の一連の御研究があり、『西鶴本の基礎的研究』(一九九〇年 明治書院刊)に収められている。

10 堤氏は「版下についても、少なくとも二、三人の手跡を見分けることができる」とされる(註4 論文 二八一頁)。

11 久保田篤氏「表記について」(『築島裕博士還暦記念国語学論集』一九八六年 明治書院刊 所収)に、近世初期の版本三種の振り仮名無し漢字の調査と、二種の資料の写本・版本比較における仮名↓漢字の調査との結果が示されている。本稿の〈表5〉〈表6〉と重なるところがある。